

## 4月展示:

# 『立教大学図書館蔵 扇の草紙屏風』

(書筆者等不明、6曲1双、37×14cm)

### 【扇の草子とは？】

扇は、開閉自在な、不思議で魅力にあふれる道具である。閉じているときは、一本の棒のようで、開くと突然、半円形の詩空間が生まれる。この扇面という形は、印象派やアール・ヌーヴォーの画家たちにも大きな衝撃を与えた。

扇の発明国は、諸説あるものの、どうやら日本と考えてよいようである。遅くとも奈良時代には作られていたとわかる。

ゆうに千年以上もの長い歴史を持っていることになる。この扇が、中国や朝鮮半島に渡ったのは、およそ十世紀頃である。ヨーロッパには、さらに遅れて十六世紀にもたらされた。

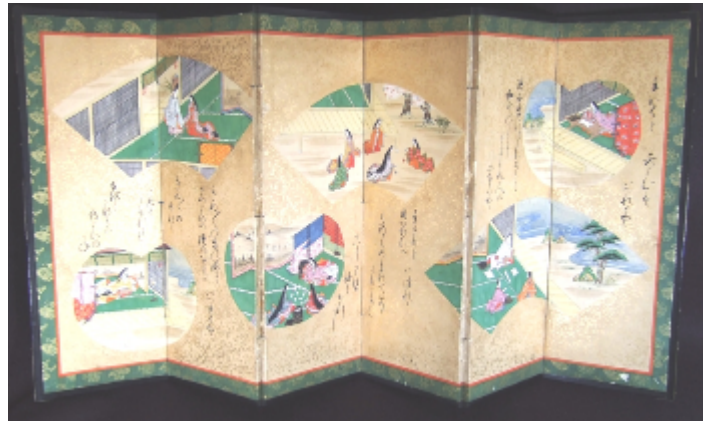
今日のような形の扇が制作されたのは、室町時代からである。日本で生まれた扇は、まず中国に輸出され、彼の地で現代のような両面に紙を貼った新しい扇が開発され、ついで、その扇が室町時代頃に逆輸入されたのである。

ちょうどこの頃につくられたのが、『扇の草子』である。『扇の草子』は、実は一作品の書名ではない。中世から近世への移行期につくられた同じ形式を有する作品群の総称である。その形式とは、扇面形の枠のなかに絵が描かれ、その周囲に、絵の内容に関連した歌が、一扇に対して一首ずつ散らし書きされたものである。「扇絵の挿絵が入った歌集」といった形式である。また…冊子本ではなく、絵巻、屏風、画帖など、様々な形状で伝存している。そしてこれらの伝本数は、確認できただけでも約三十本にもものぼるのである。…

伝本に描かれた扇絵は、稚拙だが愛らしい奈良絵本風のものがあるかと思えば、金銀泥をほどこす豪華本には、土佐派と狩野派を折衷したような画風も見られる。…現在では忘却のかなたにある『扇の草子』がかつて、十六、七世紀には、幅広い階層の人々によって、盛んに制作され、享受されていたことをものごたる。つまり、たいへん流行っていたようなのである。

ではいったい、『扇の草子』とは何だったのか。…『扇の草子』には30枚の扇絵と30首の歌から成る小品から、120扇120首もの扇絵と歌が描かれた大部の作品まである。そして、特徴は、複数の伝本に重複する扇絵と歌もあるが、伝本ごとに内容がそれぞれ異なることにある。『扇の草子』には、雅俗おりまぜた様々な歌と扇絵が、アトランダムに収められている。

『伊勢物語』や『古今和歌集』などに見られる歌から、『犬筑波集』所載の俳諧や、謡曲、狂言、お伽草子にしか見出せない歌、戦国時代の武将にまつわるエピソードとともに伝承されていた歌まであり、四季おりおりの植物や、動物、武将、女房、名所などが描かれた扇絵がある一方で、非常に謎めいた絵もある。

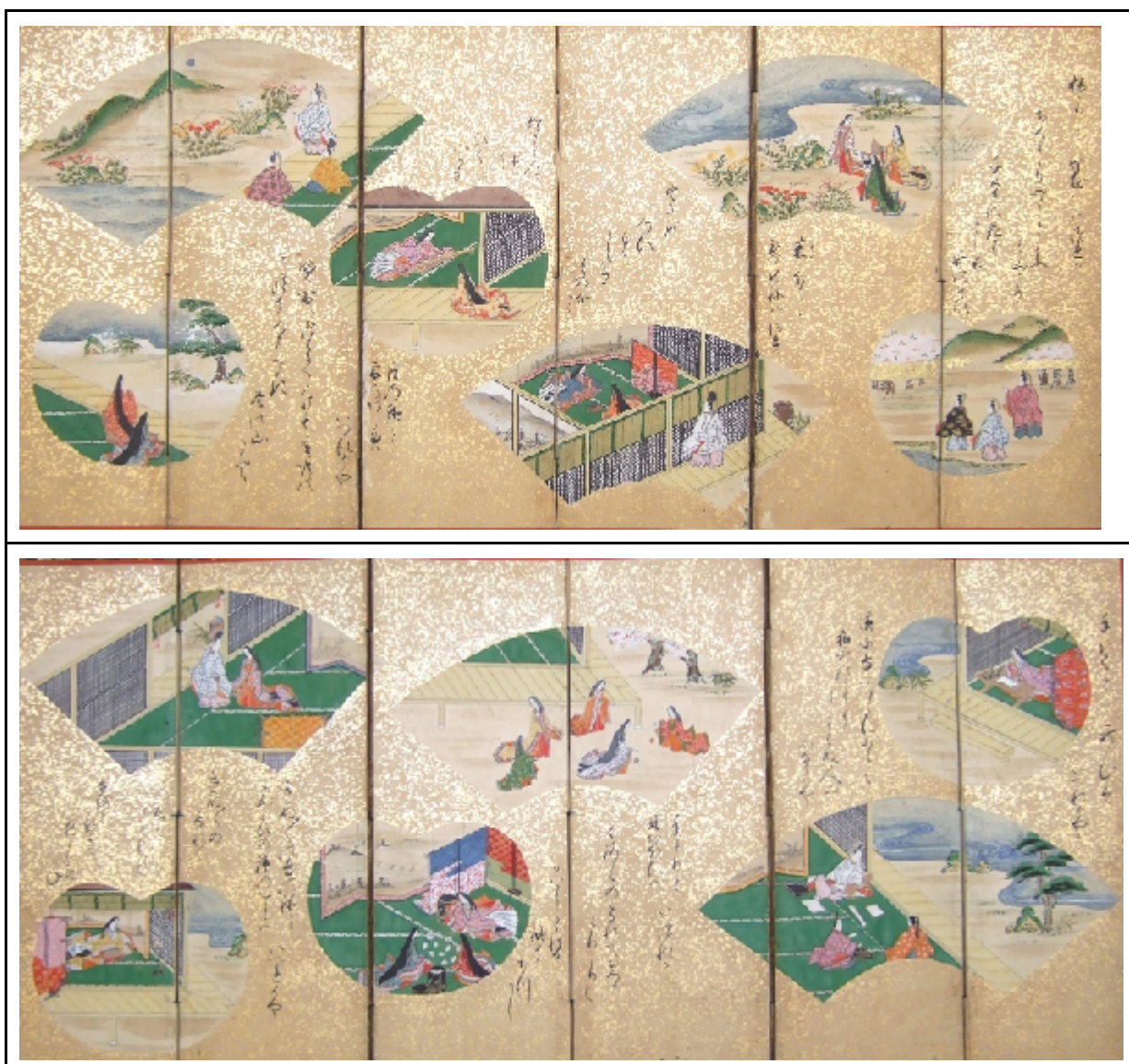


『扇の草子』の享受方法については、種々の見解がある。例えば、お伽草子のような読み物とする見方や、扇絵の見本帖との見方がある。実際の扇を用いた遊びのようなものとの関係があり、その享受者層は婦女子で、制作には、連歌師や宗教者、あるいは文化人がかかわっていた可能性が高いのではないかと考えられる。

本学兼任講師 安原眞琴

(この文章は、著者の許可をいただいて『扇の草子の研究 - 遊びの芸文』の序文から抜粋・編集させていただきました。立教大学図書館)

### 【扇絵解説】



右端から上段・下段の順で翻刻

題: 桜狩と野遊はいづれか

歌: さくらがり心もまよふみ山より 千ぐさの花にまじる野あそび

題: 薫の香りと琴の音は何れか

歌: 空だきは匂ひゆかしきものながら 猶ことのねにひく心かな

題: 月の夜と雪のあしたはいづれぞや

歌：ふる雪はつもらでかげも有明の 月ぞくまなき冬の山ざと〔四十二〕

題：手書くと哥詠むは いづれぞや

歌：浜千鳥あとだにあらば和哥のうらに まよはぬ人の心ならばや〔四十二〕

題：手鞠と貝覆はいづれか

歌：くろかみのみだれておつるまりよりも かいにかゝれる袖ぞなつかし〔四十二〕

題：きぬぎぬの鳥の声と 待つ宵の鐘の音は いづれぞや

歌：きぬぎぬの鳥なくこゑもうけれども なをはかなきは待よひのかね

\* 読みやすさをはかって、適宜、仮名を漢字に改め、濁点を付した。

\* 『四十二の物あらそひ』に見出せるものには〔四十二〕と記した。

#### 【扇の草紙屏風とは？】

では、立教大学に所蔵された屏風は、どのような資料なのだろうか。まず、大きさより、雛飾りに用いられた屏風と推測される。制作年代は、雛壇が普及し始める元禄期(一六八八～一七〇四)より、あまり下らないのではないと思われる。

次に、扇絵と和歌のみが描かれている点より、この屏風には扇合の世界が表現されていると知られる。また、歌にはそれぞれ題が付いているのだが、その題を見ると、この扇合は、春と秋といった対立する概念を題に出し、どちらが優れているかを歌にする、いわゆる春秋優劣論になっているのが分かる。題にされた二つの概念が、扇面型と団扇型に縁取られた枠内に一つずつ絵画化され、その二枚の絵の周辺に、一首の和歌とその題とが散らし書きされているのである。各屏風に、三首の和歌と六枚の絵が描かれているので、一雙の合計は六首・十二図となる。

さて、本資料が「扇の草子」であるか否かと問われれば、答えは否である。「扇の草紙屏風」とは、購入当初の仮題で、これをそのまま整理資料名に用いているのである。では、「扇の草子」とは無関係かといえば、直接の関係はないものの、近い関係にはありそうなのである。「扇の草子」には、歌合を題材にしたお伽草子『四十二の物あらそひ』の歌が少なからず採られているのだが、本資料の半数にあたる三首の和歌と題も、このお伽草子から採っているのである。扇と和歌から成るという形式や享受形態のみならず、享受者層の教養基盤も共通する本資料は、未だ謎の多い「扇の草子」の成立の背景を知るための、重要な手掛かりになるものと思われる。(安原眞琴)

#### 【扇の草子に関する文献】

『扇の草子の研究 - 遊びの芸文 - 』/安原眞琴著...ペリかん社 2003

安原眞琴「『扇の草子』新出本一覧 - 附・家蔵屏風の紹介」 伝承文学研究 57号 2008

安原眞琴「新出資料『扇の草子』について」 立教大学日本文学 78号 1997

安原眞琴「判じ絵の始発 - 『扇の草子』の雅俗」 国文学 41巻4号 1996

大口裕子・石川透「慶應義塾図書館蔵『扇の草紙』解題・翻刻・影印」 古典資料研究 3号 2001

岡雅彦「在外文献資料の紹介(三)『あふき集』」 調査研究報告(国文学研究資料館) 15号 1994

徳田和夫「扇の草紙絵巻をめぐって(序説)」 国語国文論集(学習院女子短期大学) 20号 1991

赤木信吾「扇と和歌と」 国語と国文学 65巻5号 1988

並木誠士「高津古文化会館蔵『扇面草子』について」 MUSEUM 452号 1988